深沢七郎

傑作小説集

二

甲州子守唄

読売新聞社

著者紹介　ふかざわ　しちろう

大正3年1月、山梨県東八代郡に生まれる。
昭和6年3月山梨県立日川中学校を卒業。のちクラシックギターの研究をはじめ、昭和14年に第一回研究発表会を開催。
昭和12年から16年まで富国徴兵保険会社に勤務。
昭和27年より丸尾長顕氏に師事し、日劇ミュージックホール等に出演、同時に文学を学ぶ。
昭和31年『檜山節考』で中央公論第一回新人賞を受賞。
著書は『檜山節考』『東北の神武たち』『庶民烈伝』ほか多数。

深沢七郎傑作小説集　二
甲州子守唄

昭和四十五年四月五日　第一刷

定価　五五〇円

著者　深沢七郎
発行者　二宮信親
発行所　読売新聞社
東京都中央区銀座三の二の一　〒一〇四
大阪市北区野崎町七七　〒五三〇
北九州市小倉区明和町一の一一　〒八〇二

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　協和製本株式会社

©, Shichiro Fukazawa, 1970

目次

甲州子守唄……五
あとがき……二九五

装丁　宮崎順二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

深沢七郎傑作小説集　二

甲州子守唄

朝早くから向う側の土手はマユの入っている籠モッコを担いだ人達が通っていた。
（マユを売りに、繭糸市場へ）
と、徳次郎はこっちの土手で眺めていた。すぐ横の、そこの家の中でも今朝からあの人達が通るのを眺めている母親に、
「えらく、今朝は、繭糸市場へ行くじゃアねえか」
と、徳次郎は怒るようなでかい声で話しかけた。
「お天気がいいから、急いで持って行くら、どこの家でも」
と、母親は家の中でのろのろと返事をするのだ。
「帰りは、ゼニを背負って、ホクホクで帰るら、みんな」
母親は他家のマユが通るのを眺めても嫌な気がしないらしいので、徳次郎もちょっと気が軽くなった。

「ああ、持って帰るらよ」
と、徳次郎の言いかたも静かになった。が、
「昨日あたりは値がよかったというから」
とブツブツ言った。いくらマユを売りに行ってもよその家のことなのである。養蚕をしていないからマユが通るのを見ていると、なんとなくとり残されるような気がするのだった。そこの万年橋はクイの上に板を並べただけのせまい橋だからこっち側へ来るには上の鵜飼橋へ行かなければ通れないのである。万年橋は、たまに人が通るだけだし、笛吹の川の流れは黙っている様に静かだった。
「俺家でも、あと二十年もたてば」
と家の中で母親の声がしたが徳次郎は（もう、あのことを）と黙っていた。あの事というのは徳次郎がアメリカへ行く手続をしたことだった。これから許可が下りて、アメリカへ行って、二十年も稼いで帰って来てからのことを母親は言いだしているのである。
「あと二十年もたてば、俺家でもお蚕を飼ったり」
と、また家の中でオカアが言った。そうしてまた、
「川下の、アメリカさんぐれえ」
と言って、
「川下のアメリカさんじゃア、去年も畑を買ったり、財産は二千円も貯めてるというけんど、その

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

くれえは大丈夫だぞ、なあ徳次郎、お前がアメリカへ行けば」

オカアはあんなことを言っているが（困ったことだ）と、徳次郎はなんとなく心細かった。アメリカへ行って、身体のつづくかぎり稼いで帰って来るつもりだがそのとおりにいくかどうか決めてしまうことも出来ないのである。病気になってしまうことがあるかもしれないし、それまで母親が生きているかどうかもわからないのである。家の中ではまた、

「帰って来たら、田を買うのは言うにゃア及ばンけんど、桑畑も、三反ぐれえは買わなきゃア駄目だぞ、お蚕をするにゃア」

と言った。また、

「タンボも、五反ぐれえあればいいぞ」

と言うのである。

「いまから、そんねに、アテにしても」

と徳次郎は自信もないようにブツブツ言いながら川の方を眺めた。万年橋を渡ってこっちへ来るのは妹のギンである。今朝早く、向うの山の方のアメリカさんの家へ様子を聞きに行って帰って来たのだ。

「ギンが帰って来たよ」

と家の中へ声をかけると、すぐに戸の所へ母親が顔だけ出した。

「アレ、早え、帰って来たかい」
そう言ったがギンの帰って来るのが待ちどおしかったようにギシギシと鳴る橋を眺めた。万年橋は歩けば橋がゆれて板が鳴るのである。
「兄ちゃん、聞いてきたさ、アメリカさんから」
とギンは橋を渡りながらこっちへ大声をだした。アメリカさんというのはアメリカへ出稼ぎに行って金をためて帰って来た家のことだった。
「どんなようだった?」
と母親はギンが家へ入る前に外に出て待っていた。
「とても、いいと、まあ、一日でも早く行かなきゃア」
とギンが言った。ギンは様子を聞いて来ると、いつでもこう言うのだった。
「そうずら、早く行った方が勝さ」
と、母親が嬉しそうに言った。徳次郎もホッとした。行けば、(稼いで帰って来ることに間違いない)ときまったようなものだった。
「許可さえ下りれば、今すぐにだって行きてえけんど」
と徳次郎も気がせいてくるのである。ギンが様子を聞きに行ってくるたびに気がせくのだった。向う側の土手は、もうマユを売って帰って行く人達も通っていた。売りに行くときの籠にはマユの

白い袋がつまっているが帰りは空の籠を担いで首に風呂敷包を巻きつけているのだ。首に巻きつけた風呂敷の中には売ったマユのゼニが入っているのである。

「どんな仕事をするだと？　アメリカへ行って」

と母親がギンに聞いた。

「そんなこたア、ベツに、言わなんだけんど」

ギンは聞いて来なかったのである。

「それを聞いて来なきゃア」

とオカアは横を向いてしまった。いつでもギンは一番ききたいことを聞いて来ないのである。アメリカへ行く手続を県庁へ出したのは去年の暮で、半年もたつがまだ県庁からは何の通知もないのだった。が、いつ、突然に許可が下りるかも判らないのである。

「また聞かなんだのかい」

とオカアが言った。

「聞いたけんど、ベツに、なんとも言わなんださ、なんでも、二十年ぐれえ、辛棒しなきゃだめだと教えてくれたけんど」

とギンは言いわけのように言った。

「お前が、自分で行って来なけりゃダメさ、本人の、お前が行かんという法はねえさ」

とオカアは文句のように言うのである。
「それだから俺が行くと言うのにいつでもギンが行ってしもうだよ」
と徳次郎もあわてて言った。徳次郎が行こうとすると（わしが行ってくる）とギンが行ってしまうのだった。
「もう一遍行って来るさ、なんべんでも行って、よく様子をきいてくるのに越したことはねえ」
と、母親は文句を言ったが、
「そのヒトは何年ぐれえアメリカへ行ったずら？」
と、ひとりごとのように言った。
「二十年も行って来ただと」
と、ギンが早口に言った。
「やっぱり、二十年は行って来なきゃア駄目というわけさ」
と、母親が言った。
「そういうことだ」
と、徳次郎も相槌を打った。家の横で、ガサガサと音がして、誰かが通っているらしい。
「アレ？」
と母親が言うので徳次郎は川の方を見るとマユの入った袋の籠をかついでふらふらと万年橋を渡

ろうとしているヒトがあるのだ。
「あんなところを、かついで渡るずらか？」
と母親が目をすえて眺めていた。
「あれ、無理をするジャン」
とギンが笑いながら言った。歩いて渡るだけのせまい橋を重い荷を担いで行くので橋がぐらぐらゆれるのである。
「アレッ？」
と、こんどは徳次郎が声をたてた。橋のまん中で止って籠からマユを入れた白袋を持ち上げているのである。
「なにをするずらか？」
と、ギンも言った。橋の上ではマユの袋の口をほどいているらしい。
「あッ」
と徳次郎が叫んで立ち上った。橋の上では袋の口を川に向けて持ち上げて、マユをこぼしているのである。
「あれあれ」
「どうしたずら？」

と、母親やギンがびっくりしているうちに橋の上のヒトは次のマユの袋の口も開けて川へこぼしているのだった。徳次郎はハダシで飛び出して川の中へ入って行った。水の深さは腰まではないが泳ぐようにマユの流れて行く方へ近づいて行った。白いマユが水の流れにいっぱい浮んで流されている。徳次郎は手で掴もうとしたが二ツか三ツしか掴めないのである。(とても、ダメだ)と諦めて橋の上を眺めた。橋の上ではどんどん袋からマユを川へ流しているのだった。

「どうしたでえ? おじさん」

と川の中に立って徳次郎は声をかけた。橋の上のヒトは黙っていた。徳次郎は流れているマユのなかを橋の方へ近づいて行った。

「どうしたでえ?」

と、また声をかけたが橋のヒトは禿げあがった広い額に青すじが脹れあがったように筋ばっていて、こっちを見もしないし、呼びかけても聞こえないようである。真ッ青な顔をして、流れて行くマユを眺めているだけである。徳次郎はまた川の中を歩いて家の方へ帰ってきた。

「あのヒトは、気狂(きちが)えずらよ」

と言った。

「なんぼ気狂えでも、もってえねえことを」

と、ギンが言った。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com